

大／阪／の／建／築／ま／ち／あ／る／き——「堺」

とのきじんじゃ 等乃伎神社



全体写真（拝殿）



神社の社叢



ディテール



所在地： 高石市取石 2-14-48

最寄駅： JR 富木駅 南東 800 m

TEL： 072-271-0553

建築概要

本 殿： 三間社流造り（六坪）

拝 殿： 七間社入母屋造り唐破風向拝（二十八坪）

稲荷社： 一間社春日造

手水舎： 一間社切妻造

JR 阪和線鳳駅のひとつ南にある富木駅の南東に等乃伎神社がある。古代よりこの地に祀られている。古い歴史があることは、「延喜式」の神名帳に名が記されている。そして、この土地には「殿来連（とのきむらじ）」という氏族が居住していたことが、「続日本紀」にも書かれている。また、古事記にも記録されている。仁徳天皇の時代に、「兎寸河（とのきがわ）」の西に一本の巨大な樹があり、朝日を受けるとその影が淡路島に達し、夕日を受けるとその影は高安山を越えるほどであった。この巨木から船を造ったところ、速度が速く「枯野（からぬ）」と名がつけられ、淡路島より天皇の使われる水を運んだと言われている。巨木伝説のひとつとなる。「とのぎ」という言葉は、古代新羅語の「日の出、朝日」となる。巨木伝説から見ると、夏至の日の出を高安山頂上に拝むことになり、また、高安山からは、冬至の日にこの神社の方角に日が沈むことになる。冬至の日に高安山頂から日が昇る位置に坐摩神社（いかすり）が鎮座していた。兎寸（とのき）は「とき」とも読むことができる。トキ野が訛ったトガ野に、坐摩神社が鎮座していたのは偶然ではない。双方とも太陽祭祀の場だった。現在の社殿は、天保9年（1838）来150年ぶりの昭和62年に造営された。境内地は、2694坪あり、古くは、「霞の森」と称され、樹木が繁茂していたと言われている。巨木伝説に通じる楠は、御神木として、崇められている。神社の社叢（しゃそう）は、現在、高石市の数少ない自然保護樹林に指定されている。（七堂元敏）